

『ブライズデイル・ロマンス』— 一人の奴隷解放の物語

The Blithedale Romance: The Story of the Emancipation of a Slave

倉橋 洋子*

Yoko KURAHASHI

キーワード：奴隷制廃止運動、搾取、心理的隷属、奴隷解放

Key words: abolitionist movement, exploitation, psychological bondage, emancipation

要約

『ブライズデイル・ロマンス』は1830年代から50年代の社会問題、投機熱とその後の金融恐慌、工場労働者の搾取、奴隷制廃止運動を背景にした作品である。奴隷制には無関心と言われてきた作者のナサニエル・ホーソーンは、奴隷制廃止運動には直接関与しなかったが、人間の隷属状態には関心を示し、『ブライズデイル・ロマンス』において「心理的隷属のメタファーとして奴隷の身分」を用いた。資本主義の奴隷として経済的、性的に搾取されてきた女性主人公の一人のプリシラは、理想共同体のブライズデイルにおいてさえも彼女を取り巻く人々に頼り、彼らの精神的な奴隷である。一方、彼女の周囲の人々は執着するものがあり、その奴隷となっている。語り手のカヴァデイルも当初は周囲の人々の問題には巻き込まれていなかったようであるが、プリシラに執着していたことを最後に告白する。結局、ホーソーンはプリシラのみを隷属状態から解放することで、『ブライズデイル・ロマンス』をプリシラという一人の奴隷解放の物語にしている。プリシラの解放は外的要因、他の人々の変化なしではありえないことから、ホーソーンは実際の奴隷解放は社会の大変革がなされない限り、困難であると考えていたことが読み取れる。

Abstract

The background to *The Blithedale Romance* is formed by the speculation and financial crisis, the exploited laborers, and the abolitionist movement from the 1830s to 1850s. Nathaniel Hawthorne, who was said to be indifferent to slavery, had no direct connection with the anti-slavery movement. However, Hawthorne was interested in people's enslavement and deployed "slavery as a metaphor for psychological bondage" in *The Blithedale Romance*. Priscilla, one of the heroines, who has been exploited economically and sexually as a slave of capitalism, depends on people around her even

* 東海学園大学経営学部経営学科

in Blithedale, an ideal community, and she is a psychological slave. On the other hand, people around her adhere to something and are slaves of it. Even Coverdale, the narrator, who initially seemed not to be involved in the troubles of those around him, confesses to having been attached to Priscilla, meaning he is the same as others. At the end, Priscilla is emancipated, while the others are not, by which Hawthorne makes *The Blithedale Romance* the story of emancipation of a slave. That Priscilla cannot be emancipated without external factors, the others' changes, suggests Hawthorne thought it was difficult to abolish slavery without social upheaval.

はじめに

『ブライズデイル・ロマンス』(*The Blithedale Romance*, 1852) は、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) が 1841 年に参加した、自給自足の理想共同体であるブルックファームの体験をもとにして書かれた作品である。当時のアメリカでは、アンドリュー・ジャクソン (Andrew Jackson) が 1832 年にアメリカ合衆国銀行の特許状の更新に拒否権を行使した結果、インフレや投機、それに破産が続き、1834 年と 1837 年の金融恐慌が勃発したところであった。一方、アメリカ北部では製品の生産は家庭から工場に移り、工場労働者が出現し、下層の女性も工場で働くようになった。しかし、それに伴い、工場労働者の搾取が問題となり、犠牲者としての工場労働者に奴隷のイメージが付与された。さらに 19 世紀の前半はアメリカの奴隷制に関して、ニューイングランドの知識人の間でさまざまな見解や立場が表明され、奴隷制廃止運動も始まったところであった。

ホーソーンはニューイングランド出身であるが、奴隷制廃止運動にはかかわらず、作品において奴隷制の問題を直接的には扱っていない。¹ そのようなホーソーンは奴隷制に関して、無関心、紋切型などと言われてきた。しかし、ジュリー・ハズバンド (Julie Husband) は、『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850) においてヘスターが赤ん坊を抱いてさし台に立っている姿は、女性の奴隷が競売にかけられる姿のイメージであり、ばらばらに売られる奴隷の家族を守るキャンペーンの無意識の指標であると指摘している (43 & 45)。また、トーマス・ウェルドン (Thomas Weldon) は、ホーソーンが作家として奴隷のテーマを取り上げ、作品の中で女性と奴隷を結びつけ (141-142)、特に、『ブライズデイル・ロマンス』のプリシラは、ホリングスワースの奴隷として描かれていると指摘している (142)。アーサー・リス (Arthur Riss) は、ホーソーンが作品において「心理的隷属のメタファーとして奴隷の身分を用いた」(17-18) と指摘している。また、ピーター・ベリス (Peter J. Bellis) 等は『ブライズデイル・ロマンス』には経済的、性的な搾取が描かれていると述べている (64)。

本稿では、当時の社会問題である投機熱とその後の金融恐慌、工場労働者の搾取、奴隷制廃止

運動を時代背景にした『ブライズデイル・ロマンス』では、「心理的隷属のメタファーとして奴隷の身分」がどのように用いられているかを分析する。その上で『ブライズデイル・ロマンス』を、カヴァデイルを語り手としたプリシラという一人の奴隷解放の物語として読むことを試み、そこからホーソーンの奴隷解放に対する見解を考える。

第一章 ホーソーンと奴隷制廃止運動

最初に 19 世紀の奴隷制廃止運動をホーソーンとの関連において考察する。1830 年代にはさまざまな奴隷制反対の動きがホーソーンの本拠地であるニューイングランドの知識人の中で始まった。たとえば、マサチューセッツ州ではすでに 1783 年に奴隷制度の非合法が宣言されていたが、1832 年にウィリアム・ロイド・ギャリソン (William Lloyd Garrison) がニューイングランド奴隷制度廃止協会を設立した。また、ホーソーンと同時代の女性作家、リディア・マライア・チャイルド (Lydia Maria Francis Child) も、1833 年にいち早く『アフリカ人と呼ばれる人々の階級を支持する訴え』(An Appeal in Favor of That Class of Americans Called Africans) を出版して人々に多大な影響を与えた。しかし、チャイルドは黒人奴隷の悲惨さを赤裸々に告発した結果、保守的な読者の批判を浴びることになった。1830 年代に奴隷制反対を明白に表明することにはリスクが伴ったのである。一方、1839 年にホーソーンが家に招待されたこともあるユニテリアン派のウィリアム・エラリー・チャニング牧師 (William Ellery Channing) は、『奴隷制』(SLAVERY) を 1835 年に出版し、そこで奴隷制反対を意思表示した。しかし、チャニング牧師は、奴隷は解放後も保護者 (guardian) のもとにおかれるべきであるという立場をとり、運動には加わらなかった。さらに、ホーソーンのコンコード時代の隣人の超越主義者、ラルフ・ワルド・エマーソン (Ralph Waldo Emerson) も、1850 年の「逃亡奴隷法」に賛成を表明した政治家、ダニエル・ウェブスター (Daniel Webster) や「逃亡奴隷法」に対して、強く反対を表明しないマサチューセッツ州の市民に、怒りをあわらにした (Gura 242)。² また、ハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ (Harriet Elizabeth Beecher Stowe) が 1850 年代に『アンクルトムの小屋』(Uncle Tom's Cabin, 1852) を出版したことは周知のことである。

ホーソーンの身边でも、妻のソファイア (Sophia) の姉であるエリザベス・ピーボディ (Elizabeth Peabody) は、1850 年代までに奴隷制廃止運動や反奴隷制作家のマティー・グリフィス (Mattie Griffith) にエネルギーを注ぎ始めるようになった (Ronda 263-264)。また、ソファイアの姉、メアリー・ピーボディ・マン (Mary Peabody Mann) の夫のホレス・マン (Horace Mann) は、奴隷制度反対のホイッグ党の所属で 1849 年に下院議員に再選された経緯がある。メアリーもキューバ滞在中から奴隷制の残酷さを周囲の人々に訴え、帰国後は夫や姉と奴隷制に反対する行動を共にした。

ホーソンはこのようにさまざまな奴隷制廃止運動を見聞きすることがあった。さらに、ラリー・レノルズ (Larry J. Reynolds) によれば、ホーソンは「キューバ・ジャーナル」(“Cuba Journal”) から奴隷制を学んだ (44)。「キューバ・ジャーナル」とは、まだ独身であったソフィアが偏頭痛の治療のために、またその姉のメアリーが付き添い兼家庭教師としての仕事をするために 1833 年から 1835 年に滞在したキューバから、家族に宛てて書いた手紙をまとめたものである。それにはキューバの奴隷制の実態や近況報告が書かれている。また、アンナ・ブリックハウス (Anna Brickhouse) は、ホーソンがセイラムの税関の官吏 (1846 年-1849 年) として、「不法な奴隷貿易」(illegal slave trade) (182) を特別に見る機会があったことを指摘している。

しかし、ホーソンは奴隷制廃止運動に直接関与しなかった。その理由はよく指摘されることであるが、ホーソンが奴隷制賛成論者のフランクリン・ピアース (Franklin Pierce) のために『ピアース伝』(*The Life of Franklin Pierce*, 1852) を書いたことと無関係ではない。それは、ソフィアが 1857 年 9 月にエリザベスに宛てた手紙において、大統領になったピアースのおかげでホーソンがリバプール領事の職を得ることができたから奴隷制廃止運動にかかわらないと思っているのだろう、と抗議していることに露呈されている (Ronda 265)。また、ホーソンとソフィアは、特に自分の子供たちを奴隷制の恐怖にさらすことを懸念していた。彼らがりバプール滞在中 (1853 年-1857 年) に、エリザベスが子供たち、特にユーナ (Una) に奴隷制に関する手紙を書くことを止めるようホーソンは強く抗議した (Ronda, 264)。ホーソンとソフィアは、無邪気な子供の目に残酷な光景を見せたくないと思っていたようである。さらに、エリザベスがホーソンに奴隷制反対のパンフレットを送ると、ホーソンは 1857 年 8 月 3 日付の手紙でエリザベスは「物事を斜めにみている」と次のように抗議している。

I return this manuscript pamphlet on the Abolition question; for I do not choose to bother Sophia with it, and yet should think it a pity to burn so much of your thought and feeling. You had better publish it. I speak trustingly, though not knowingly, of its merits; for to tell you the truth, I have read only the first line or two, not expecting much benefit even were I to get the whole by heart. No doubt it seems the truest of truth to you; but I assure you that, like every other Abolitionist, you look at matters with an awful squint, which distorts everything within your line of vision; and it is queer, though natural, that you think everybody squints except yourselves. Perhaps they do; but certainly *you* do. (18 : 89)

レノルズは、「ホーソンにとって、奴隷制反対論者による情熱と興奮は人間行動において最善でなく最悪なものをもたらした」(50) と述べている。当時の北部の人たちは奴隷制廃止への支

持と奴隷制反対論者への支持を区別していたが、ホーソーンも同様の考え方をしていたようである。

ホーソーンは『ピアース伝』を書いたことにより直接奴隷制廃止運動に参加することは避けてきたが、全く奴隷制に無関心だったわけではなく、むしろ人間の隷属状態や隷属関係には興味を抱いていたと考えられる。それは、『アメリカン・ノートブックス』(*The American Notebooks*)に奴隷や人間の隷属性に関する記述が散見することからも伺える。現実の運動を避けてきたホーソーンではあるが、アーサー・リスが指摘するように、作品において「心理的隷属のメタファーとして奴隷の身分を用いた」(17-18)のである。

第二章 資本主義の奴隷としてのフォントロイ

『ブライズデイル・ロマンス』は、ホーソーンがソファイアとの結婚の資金調達のために参加したと言われているブルックファームの体験をもとに書かれたが、その参加は金融恐慌の4年後の1841年であった。マーシャル・メーガン(Marshal Megan)が当時の経済状況を次のように説明している。

1832年に再選を確実にしようと、アンドリュー・ジャクソンは、アメリカ合衆国銀行(アメリカ第二合衆国銀行)の特許状の更新に拒否権を行使し、すべての連邦の金を引き出し、アメリカの脆弱な経済を弱体化する結果となり、急速なインフレと歯止めの利かない投機の時期を招いた。そのインフレと投機熱は、財政的に不安定な地方の銀行家が、ニコラス・ビドル(銀行総裁)の巨大な合衆国銀行に取って代わろうと殺到して、1834年と1837年に起こった金融恐慌によって中断された。(287-288)

ジャクソンの時代のアメリカは機会の土地であったが、投機の土地とも考えられ(Amireh x)、一夜にして破産した者も少なくなかった。

『ブライズデイル・ロマンス』の語り手である詩人のカヴァデイルは、このような時代の現実の社会を「錆びた鉄の枠組み」(the rusty iron frame-work of society)(3:19)であると語る。さらに、次のようにカヴァデイルはブライズデイルに来た目的を「間違った、残酷な原理以外のものによって支配される生活の一つの例を人々に示すため」と述べている。

It was our purpose—a generous one, certainly, and absurd, no doubt, in full proportion with its generosity—to give up whatever we had heretofore attained, for the sake of showing mankind the examples of a life governed by other than the false and cruel principles, on which human society has all along been based.

(3: 19) (下線部引用者)

人間社会がずっと基礎としてきた「間違った、残酷な原理」とは、プライズデイルにおけるように、誰もが同じように作業を行い、自給自足の生活をする社会主義的な原理の対局にある原理、すなわち資本主義社会の原理であろう。

資本主義社会の奴隷になるのは、フォントルロイことムーディ老人である。フォントルロイは、中部諸州の上流階級、資産家であったが、怠惰から資産を使い果たし、「このとりに足りない男のために社会全体の機構を変えない限り」(“unless it should change its entire constitution for this man’s unworthy sake” (3: 183) 社会が許すことのできない罪を犯し、彼の妻は夫の不名誉に耐えきれずに亡くなった。ロベルタ・ウェルダン (Roberta Weldon) は、フォントルロイの罪は近親相姦であると暗示されているとの見解を示している (88-89)。しかし、彼の罪は「偽りの状態」(artificial state) から生じる類の罪であり、「債権者」(creditor) (3: 183) がいることから判断すると、人々の心を弄ぶ金銭詐欺であろう。また、その罪は「殺人」(3: 183) なら許されたかもしれないが、許されない罪であると表現されていることから判断すると、当時いかに人々が金銭に呪縛されていたかがわかる。金銭に支配されたフォントルロイは比喩的な意味において資本主義の奴隷であるが、自らの意志で奴隷になり、詐欺を働いたと考えられる。

第三章 プリシラの搾取

19世紀に入って下層の女性の職場は家庭から、工場に移動した。特に、マサチューセッツ州のローエルは1820年代に計画的な繊維工場地帯となり、1850年代までにアメリカ最大の工場地帯となった。アマル・アミレ (Amal Amireh) は、犠牲者としての労働者のイメージの一つが奴隷であること、作家たちが工場組織と南部の奴隷制との類似を描いていること、さらに工場労働者(男性)とお針子が類似していることを指摘している (42-43)。すなわち、お針子のイメージは奴隷のイメージとつながるのである。一般的なお針子のイメージをホーソーンは「人生の行列」(“The Procession of Life”)において次のように描いている。

But what is this crowd of pale-cheeked, slender girls, who disturb the era with the multiplicity of their short, dry coughs? They are seamstresses, who have piled the daily and nightly needled in the service of master-tailors and close-fisted contractors, until now it is almost time for each to hem the borders of her own shroud. (10: 209-210)

「人生の行列」のお針子のイメージは、不健康そのもので、ホーソーンは同時代の人々と同様に針仕事を最悪の搾取された仕事で、新しい社会経済関係の犠牲の代表としてみなしていた (Amireh 81)。

『ブライズデイル・ロマンス』においてお針子に設定されているのは、プリシラとその母親である。フォントルロイはボストンで、一人のお針子と再婚し、その後誕生したプリシラもお針子になる。プリシラに「お針子の痕跡」(“needle marks”) (3: 34) を見出して貶めるのは、皮肉にも母親違いのフォントルロイの娘のゼノビアである。プリシラを妹と知らないゼノビアが描く彼女のイメージは、「人生の行列」で描かれたお針子のイメージと違わない。フォントルロイが、プリシラの母親と出会った貧民の家と化したボストンの旧総督邸は、フォントルロイの上層から下層への社会的流動性を象徴している。フォントルロイの豊かな時代に高貴な母親から誕生したゼノビアと、彼の貧しい時代にお針子の母親から誕生したプリシラは、同じ父親の娘でありながら、上層階級と下層階級、資本家階級と労働者階級の対立構図を象徴し、皮肉な二人の遭遇を強調するとともに、プリシラの惨めさも強調する。

プリシラは絹の財布を製作し、父親のフォントルロイが酒場等で販売し、詩人のカヴァデイルも購入したことがある。カヴァデイルは「この財布こそがプリシラ自身にまつわる謎の象徴ではないか」(3: 35) と思うように、カヴァデイルの財布の描写には女性性器のイメージが伴う。ピーター・ベリス (Peter J. Bellis) 等が『ブライズデイル・ロマンス』における経済的、性的な搾取を指摘しているように (64)、プリシラは経済的、性的に搾取されてきたことが示唆されている。ムーディ老人が実の娘のプリシラを搾取することができるのは、彼の「虚飾」(show) (3: 193) と関係がある。金銭的に困窮したムーディ老人は亡くなった弟の財産を相続できるが、過去の犯罪が知られることを恐れ、すなわち「虚飾」(show) のためにそうしないで、ゼノビアに相続させるつもりである。ムーディ老人の虚飾は、世間から「いつもそのうしろに自分を隠していた」(3: 179) 左目にかけたり、右目にかけたりする眼帯に象徴されている。⁴ そのようなムーディ老人は、「プリシラだけを愛しているが、恥で愛しており、誇りを持って愛しているのではない」(“I love her only!—but with shame, not pride”) (3: 193) と自覚している。ムーディ老人のプリシラへの自虐的な愛には、上層から下層への社会的流動性の結果誕生した娘の存在を、恥と思う気持ちが根底に潜んでいる。そのためにムーディ老人はプリシラを搾取の対象にできる。このようなムーディ老人は「虚飾」の奴隷でもあるが、彼に搾取されてきたお針子のプリシラも比喩的な意味で奴隷である。

プリシラと奴隷との結びつきは、「ゼノビアの伝説」で示唆されたプリシラとヴェールの婦人との結びつきにも示されている。ヴェールの婦人は魔法使いの「奴隷」(bond-slave) (3: 116) になったと表現されているが、魔法使いとは、催眠術を駆使するウエスタヴェルトのことである。ブライズデイルに来る以前に、ヴェールの婦人としてプリシラが、ウエスタヴェルトにより経済

的、及び性的に搾取されていたことを示唆するものに伝道師からの手紙がある。その手紙にはプリシラがブライズデイルの共同体を避難所とすることが望ましく、最近プリシラはある特別な危険、困難の状況から逃れたが、まだ危険や困難な状況にあることが仄めかされている。プリシラはブライズデイルに来る以前には、「耐え難い束縛に拘束され、それから自由になるか、滅ぶかであった」(“the poor girl was enthralled in an intolerable bondage, from which she must either free herself or perish.”) (3: 190)。ヴェールの婦人であったプリシラは、ウエスタヴェルトの奴隷になっていたのである。

第四章 ブライズデイルにおけるプリシラの隷属状態

ブライズデイルにおいてプリシラは身体的に実体がなく、精神面においても自立することができない。彼女の状態は、自立が困難な解放奴隷が元の主人から離れられない隷属状態に酷似している。牧師が共同体を彼女の避難所として選んだのは、資本家と労働者、上層階級と下層階級の区別のない、「農夫と詩人は皆同じ仕事をする」共同体では搾取が考えられないからであろう。しかし、農夫のサイラス・フォスターがいたずらなプリシラに対して、3本の馬の蹄鉄で締め上げ、身体を鎖で柱に縛りつけると脅すが、それは鎖で繋がれた奴隷のイメージを想起させる。

また、プリシラの隷属状態は、ゼノビアとの関係においてもみられる。プリシアは、幼少の頃から姉のゼノビアについてムーディ老人からおとぎ話の代わりに聞き、ゼノビアを崇拜し、憧れ、プリシアの愛はゼノビアの周りにブドウのつるのように巻き付いている。プリシラにとってゼノビアは偶像も同然の存在である。よって、ブライズデイルにおいて頼る者が存在せず心身ともに自立が困難なプリシラは、ゼノビアの僕(しもべ)のように振る舞う。カヴァデイルからみるとプリシアはゼノビアの奴隷(slave) (3: 33) である。

さらに、プリシラはカヴァデイルの唱える「政治」を女性に委ね、「牧師の職」を女性に認めようとする見解を拒絶する。⁵ 女権拡張論者のゼノビアからみると、プリシラは「男性が何世紀もかかって作りあげてきた女性の象徴」(3: 122) である。さらに、次に示すホリングスワースの男性と女性の関係性に関する見解を、プリシラは意義を唱えることなく受け入れる。

“She is the most admirable handiwork of God, in her true place and character. Her place is at man’s side. Her office, that of the Sympathizer; the unreserved, unquestioning Believer; the Recognition, withheld in every other manner, but given, in pity, through woman’s heart, lest man should utterly lose faith in himself; the Echo of God’s own voice, pronouncing — ‘It is well done!’... Man is a wretch without woman; but woman is a monster—and, thank Heaven, an almost impossible and hitherto imaginary monster—without man, as her knowledge principle! The

heart of true womanhood knows where its own sphere is, and never seeks to stray beyond it!”

(3: 122-23) (下線部引用者)

ホリングスワースの求める女性は男性の補助的な役割を果たす従順な「真の女らしさ」を備えた女性であり、自立した女性ではない。これまで奴隷状態であったプリシラがホリングスワースの見解に反論しないのは、ブライズデイルにおいて唯一頼れる保護者としてのホリングスワースに隷属しているからである。すなわち、この時点のプリシラにおいて重要なことは、女性の地位向上を求めることよりもっと低次元の身体的な安全である。さらに、カヴァデイルの考えやゼノビアの女権拡張論にプリシラが驚愕するのは、プリシラの持っていた従来の家父長制における女性の役割に関する固定概念が崩れるからである。ホリングスワースの見解に反論しないプリシラには、奴隷のイメージが付きまとう。それは、ホリングスワースが、女性がいるべき場所を超えるならば、奴隷のように鞭打つてでも連れ戻すべきだとすることに象徴されている。結局、ホリングスワースの考えを盲信するプリシラは、ゼノビアからみると彼の奴隷であり、隷属状態にある。

生まれてから隷属状態にあったプリシラは、絶えず主人、保護者を求めてきたために、ブライズデイルにおいてたとえ身体的な奴隷状態から解放されても、自立することができない。真の自立には精神的自立が必要であるが、それには教育が必要である。ホーソーンも『アメリカン・ノートブックス』において、次のように「命令する人が亡くなっても、服従していた人は残りの人生も、同様にして過ごす」(226) と人間の隷属性について述べている。

Some man of powerful character to command a person, morally subjected to him, to perform some act. The commanding person to suddenly die; and, for all the rest of his life, the subjected one continues to perform that act. (8: 226)

プリシラのように習性となった隷属性は、変更することが難しいということである。

第五章 プリシラの隷属状態からの解放

ムーディ老人がプリシラをヴェールの婦人の役割から解放し、ブライズデイルへ連れてきた理由は、彼が現実を受け入れたことと関係している。かつて、フォントルロイは「現在の陰惨な状況から過去の壮麗を眺めた。そして、昨日の長者が本当なのか、今日の貧者が本当なのかといふかった」(3: 185)。フォントルロイは、ゼノビアの中に過去の自分の栄光を見ることができ、栄光の夢を託すことができるが、その一方でプリシラの中に現在の哀れな自分を見出す。ゼノビアとプリシラは、ムーディ老人からみれば過去と現在、虚飾と現実、富と貧困の象徴で、2人の

間で揺れ動くムーディ老人は、その名前の通り動揺している。彼が現実を直視すればプリシラに傾き、過去の栄光、「虚飾」にひたれば、ゼノビアに傾く。ムーディ老人がプリシラを解放する行為は、彼が過去の栄光、虚飾よりも現実を受け入れることを選択した結果である。この時点で、ムーディ老人は、虚飾から半ば解放される。さらに、ゼノビアの養父である弟の遺産を法的に相続することができるムーディ老人は、ゼノビアがホリングスワースをめぐる三角関係からプリシラを再びウエスタヴェルトに引き渡したために、財産をゼノビアに渡さないようにする。ゼノビアとプリシラ、過去の栄光、虚飾と現実の間で揺れ動いていたムーディ老人は、現実には傾き、虚飾からは解放される。しかし、彼にとって虚飾の象徴のゼノビアを失うことになる。

ところで、ゼノビアは妹と知らずにプリシラをウエスタヴェルトに引き渡すが、それはゼノビアが年季奉公の「奴隷」(bond-slave) (3: 217) のするように、ホリングスワースを獲得するという目先の小さな幸福に突進したからである。ゼノビアは自ら「神のささやかな微笑と先導してくれる一人の誠実な男性 (one true heart) がいれば、申し分のない女性になれたかもしれない」(3: 218) と述懐しているように、金銭的には恵まれていたものの「誠実な男性」、真の愛に飢えていた。「誠実な男性」とは、父親、夫、恋人のことである。愛に飢えていたゼノビアは女権拡張論者になるものの、当時では受け入れられず、また未熟な女権拡張論者であるために矛盾をきたす。ゼノビアはムーディ老人の虚飾であるが、ムーディ老人に翻弄され、彼女自身も愛を求めて虚飾の人生を歩むことになるのである。

一方、ゼノビアの金銭を当てにして犯罪者の構成施設を建設しようとしているホリングスワースは、「大きな目的に先進する人間が必ずそうなるものであるが」、「博愛主義の奴隷」(bond-slave) (3: 55) である。ホリングスワースはゼノビアによりウエスタヴェルトに引き渡されたプリシラを救出するが、それはゼノビアが財産を相続できなくなり、無一文になったのを知ってからである。財産を相続するプリシラを選ぶホリングスワースは、資本主義の奴隷でもある。ホリングスワースのプリシラの救出には明らかに打算があるが、ホリングスワースはプリシラのように批判精神を持たず、全面的に自分を是認してくれる女性を必要としていたこともある。結局、ゼノビアを入水自殺で失い、自分が「殺人者」(3: 243) になったと悩むホリングスワースは、次のように落胆と憂鬱な状態、鬱状態に陥る。

As they approached me, I observed in Hollingsworth's face a depressed and melancholy look, that seemed habitual; the powerfully built man showed a self-distrustful weakness, and a childlike, or childish, tendency to press close, and closer still, to the side of the slender woman whose arm was within his. In Priscilla's manner, there was a protective and watchful quality, as if she felt herself the guardian of her companion, but, likewise, a deep, submissive, unquestioning

reverence, and also a veiled happiness in her fair and quiet countenance. (3: 242)

ホリングスワースは、ゼノビアの死により「殺人者」となり、博愛主義の奴隷から比喩的な意味で永遠に解放されない罪悪感の奴隷になる。

ところで、姉のゼノビアとホリングスワースとの間で、自分の意志で迷うこともなくホリングスワースを選んだプリシラの選択は、彼女がゼノビアによりウェスタベルトに引き渡され、以前から頼っていたホリングスワースにより救い出された経過を考えれば、当然の結果である。身体的な奴隷状態から解放され、財産も愛する人も手に入れたプリシラは、おとぎ話の憧れのお姫様から、モデルへ、さらにライバルとなったゼノビアに巻きつく必要もなく、自立の道を歩み始める。さらに、プリシラは、ホリングスワースが鬱状態になったことにより、恋人というよりも、保護者、母親役を担い、立場が逆転する。逆説的に言えば、プリシラの隷属状態からの解放は、経済的自立に加え、保護者の立場のホリングスワースの変化と憧れのゼノビアに執着する必要がなくなったことにある。プリシラは外的要因により隷属状態から解放されたのである。

おわりに

以上みてきたように、ホーソーンは奴隷制廃止運動には直接かかわらなかったが、1830年代から50年代のアメリカの社会問題を背景にした『ブライズデイル・ロマンス』において、「心理的隷属のメタファーとして奴隷の身分を用い」、社会において人とのかかわりから生じる隷属関係や、物事に執着することからその奴隷となることを描いてきた。資本主義の奴隷として搾取され、心身ともに奴隷状態を経験したのはプリシラのみであるが、理想共同体のブライズデイルに来てからも周囲の人々への隷属状態が続く。しかし、プリシラのみが外的要因、他の人々の変化によりに隷属状態から解放される。ホーソーンは、人間関係において隷属状態に陥らされた者は、隷属性が身につく、解放されることがいかに困難であるかを語っている。また、ゼノビアによれば、ホリングスワースはカヴァデイルも「奴隷」にしようとするが、そうはならなかった (3: 218)。それは、カヴァデイルは他人とのかかわりを持たないために、支配し、支配される心理的隷属状態とは無縁であるからだ。しかし、カヴァデイルの最後の告白、「私は、私自身は、プリシラが好きだった！」 (3: 247) は、カヴァデイルがプリシラに囚われていたことを示している。他人とは距離を置き、彼らの問題には巻き込まれなく、誰からも必要とされないカヴァデイルではあるが、隷属状態のプリシラに詩人として興味があり、執着していたのではないだろうか。語り手のカヴァデイルの告白により、『ブライズデイル・ロマンス』において、誰もが隷属状態に陥っていることが明らかになる。しかし、プリシラのみが隷属状態から解放され、『ブライズデイル・ロマンス』はプリシラという一人の奴隷解放の物語となる。プリシラの解放は外的要因によることから、ホーソーンは実際の奴隷解放は社会の大変革がなされない限り、困難であると考

えていたことが読み取れる。

註

1. ソファイアから姉のエリザベスへの 1838 年 5 月の手紙によると、ソファイアとともにキューバに滞在して奴隷制を実体験したホーソーンの義姉、メアリーは、ホーソーンが奴隷制を作品において扱うよう提案したが、ホーソーンはその考えを取り上げなかった (Woodson 25-26)。
2. エマーソンは 1844 年の夏に、コンコード反奴隷制女性の会 (Concord Female Antislavery Society) の依頼により、旧牧師館の敷地にてスピーチを行う予定であったが、雨で中止となり、裁判所でコンコードの聴衆を前に行った (Gura 243)。
3. 針仕事は当時家庭の女性の仕事とされていた。しかし、『緋文字』におけるヘスターの針仕事は、19 世紀の一般的な惨めなお針子や家庭の女性の針仕事のイメージとは異なる。『緋文字』のヘスターの針仕事は、自立する女性の手段であり、A の文字の刺繍は自己主張の象徴で芸術性にも富む。
4. ハーヴェイ・L・ゲーブル・ジュニア (Harvey L. Gable, Jr) は、ムーディ老人はゼノビアに傾くときには眼帯を左目にかけ、プリシラに同情する時には右目に移動させていることを指摘している (166)。
5. マーシャルによれば、ホーソーンの妻のソファイアは 15 歳の時、ハーバード大学出の若い牧師の才能に嫉妬を覚え、牧師になることを望んだ時期があった (213)。

参考文献

- Amireh, Amal. *The Factory Girl and the Seamstress: Imagining Gender and Class in Nineteenth Century American Fiction*. New York: Garland Publishing, Inc., 2000.
- Bellis, Peter J. *Writing Revolution: Aesthetic and Politics in Hawthorne, Whitman, and Thoreau*. Athens: U of Georgia P., 2003.
- Brickhouse, Anna. *Transamerican Literary Relations and the Nineteenth-Century Public Sphere*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Gable, Jr. Harvey L. *Liquid Fire: Transcendental Mysticism in the Romances of Nathaniel Hawthorne*. New York: Peter Lang, 1998.
- Gura, Philip F. *American Transcendentalism: A History*. Farrar, 2008.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. 16 vols. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1971-1985.
- Husband, Julie. *Antislavery Discourse and Nineteenth-Century American Literature: Incendiary Pictures*. New York: Palgrave Macmillan, 2010.
- Marshall, Megan. *The Peabody Sisters: Three Women Who Ignited American Romanticism*. Boston: Houghton Mifflin Co., 2005. (メーガン・マーシャル『ピーボディ姉妹——アメリカ・ロマン主義に火をつけた三人の女性たち』大杉博昭・城戸光世・倉橋洋子・辻祥子訳 南雲堂、二〇一四年)
- Reynolds, Larry J. *Devils and Rebels: The Making of Hawthorne's Damned Politics*. An Arbor: U of Michigan P., 2013.

- Riss, Arthur. *Race, Slavery, and Liberalism in Nineteenth-Century American Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Ronda, Bruce A. *Elizabeth Palmer Peabody: A Reformer on Her Own Terms*. Cambridge: Harvard UP, 1999.
- Weldon, Roberta. *Hawthorne, Gender, and Death: Christianity and Its Discontents*. New York: Macmillan, 2008.
- Woodson, Thomas. Introduction. *The Letters, 1813-1843*. By Nathaniel Hawthorne. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Thomas Woodson et al. Vol. 15. Columbus: Ohio State UP, 1984.